DOI :10.6205/jpllat ISSN 1727-2262

台灣日本語文學報

45

【論　　文】

下岡友加　植民者は被植民者の文化を語りうるか？
—『台湾愛国婦人』掲載・西岡英夫（英塘翠）「生蕃お伽噺」
をめぐる考察— …… 1

鄭　家瑜　『日本書紀』における持統天皇像
—漢籍との関連を中心に— …… 25

王　憶雲　岩野泡鳴の小説集『非凡人』と〈一元描写〉
—物語論を通して— …… 51

落合由治　AIの技術的発展と日本語教育研究との接点
—人材育成方向の軌道修正と拡大のために— …… 76

賴　錦雀　紀行文から見た村上春樹の旅先へのイメージ
—『ラオスにいったい何があるというんですか』を中心に— … 102

林　慧君　日本語における否定を表す外来語系の接頭辞的要素「ノン-」
と「ノー-」 …… 118

跡部千絵美　女性向けゲームにおける男性の一人称代名詞
—「俺」「僕」が用いられるキャラクターの属性— …… 143

賴　鈺菁　江藤新平の近代国家の構想
—「富国」を中心に— …… 168

【活動彙報】

2019年1月～6月例会要旨および活動報告 …… 192

2019年6月
台灣日本語文學會

DOI: 10.6205/jpllat.201906_(45).0002

《日本書紀》中之持統天皇的形象
—與漢籍之關聯為主—

鄭家瑜
政治大學日本語文學系副教授

摘要

《日本書紀》全書採用了漢字來表記，使用漢文文體，大量採用中國式的文字潤飾以及典故。漢籍對於《日本書紀》的影響與形塑之重要性不言而喻。但另一方面，《日本書紀》受到漢籍的影響，卻又有部分將其用法加以轉化，同時也有許多部份借用了中國的思想以及人物形象。究竟《日本書紀》又是如何「使用」這些漢籍文句和典故?它們在《日本書紀》中帶著怎樣的意涵?本論文作為考察《日本書紀》如何接受漢籍影響之作業的一環，選取距離《日本書紀》成立期最近的持統天皇為考察對象，並以其與漢籍之關聯為中心，探索《日本書紀》所描繪的持統天皇的人物形象。

透過本論文的考察，可以歸納出以下兩點結論。(一)《日本書紀》所描繪的皇后(鸕野讚良皇女)，是一位具有「母儀」、「能輔佐君主」、並且「謙虛恭儉」等美德者，其形象裡包含著漢典中理想的皇后形象。(二)《日本書紀》所描繪之持統女帝，其形象與中國歷史上最初的女帝武則天之形象極其相似。可說是以武則天為範本，持統女帝具有開拓偉大時代、有威權、接近「神聖之神」、位於高天原照耀大地的太陽女神等形象之女帝。

關鍵詞：日本書紀、持統天皇、人物形象、漢籍、則天武后

DOI: 10.6205/jpllat.201906_(45).0002

Image of Emperor Zidou in *Nihon Shoki*: Centering the Relationship with Ancient China Books

Cheng, Chia-yu

Associate professor, National Chengchi University, Taiwan

Abstract

Nihon Shoki was written in Chinese characters, composed of Chinese grammar and modified mostly with Chinese literary style and quotation. The importance of *Nihon Shoki* influenced and shaped by Ancient China books is clear to find. How did *Nihon Shoki* use these Chinese texts and allusions? What did they mean in *Nihon Shoki*? This paper, part of studying how *Nihon Shoki* is influenced by Ancient China books, focuses on the image of Emperor Zidou who was closest to the time *Nihon Shoki* was accomplished, centers the relationship with Ancient China books, and explores the character image of Emperor Zidou.

This paper has two conclusions as followed:(1) *Nihon Shoki* depicts The Queen (Unonosararaouzyo) as a virtue with " motherly model", "can help the emperor" and "modest and compliment". Her image contains the ideal queen image in Chinese classics.(2) The image of Emperor Zidou portrayed in *Nihon Shoki* is very similar to the image of the first female emperor Wu Zetian in Chinese history. It can be said that Wu Zetian is her model. Emperor Zidou is a female emperor with the image of developing a great era, having authoritarian power, closing to the "Holy God" and a sun goddess in the high heaven shining the earth.

Keywords: *Nihon Shoki,* Emperor Zidou, character image, Ancient China books Wu Zetian

DOI: 10.6205/jpllat.201906_(45).0002

『日本書紀』における持統天皇像
—漢籍との関連を中心に—

鄭家瑜
政治大学日本語文学科副教授

要旨

『日本書紀』全書は「漢字」で表記され、漢文の文体、文字の潤飾、中国の典故などが用いられている。漢籍からの影響が『日本書紀』の形成には重要な意義を有しているのは言うまでもない。果たして『日本書紀』は如何に漢籍の語句、典拠、思想を「使用」したのか。これら漢籍の語句、典拠、思想は『日本書紀』においてどのような意味を有しているのか。これら『日本書紀』における漢籍からの影響・受容についての考察の一環として、本稿では、『日本書紀』の成立期に最も近く在位した持統天皇に焦点を当て、漢籍との関連を中心に、持統天皇の人物像を考察してみた。

本稿の考察を通して、次の二点が指摘できよう。（一）『日本書紀』に描かれている皇后としての鸕野讃良皇女は「母としての徳がある」、「君主を補佐する」、「謙虚で恭倹である」などの美徳の持ち主であり、その形象には漢籍における理想的な皇后像が内包されている。（二）女帝としての持統天皇は、当代の中国歴史上の唯一の「女帝」とされる武則天の形象に近似している。武則天をモデルとし、偉大な時代を切り開くパワフルな「聖なる神」に近い存在で、高天原で地上を照らす太陽の女神らしい「高天原広野姫天皇」的な女帝の形象を描こうとしていた意図が『日本書紀』にはあったと考えられる。

キーワード：日本書紀、持統天皇、人物像、漢籍、則天武

『日本書紀』における持統天皇像
—漢籍との関連を中心に—

鄭家瑜
政治大学日本語文学科副教授

1. はじめに

古代東アジアにおいて、「漢字」が極めて重要な「伝播」の媒介である。「漢字」を通して、東アジアは文化、政治、経済、宗教など諸方面の交流が行われていた。それにより、「漢字」を中心としての東アジアの共通文化圏が形成されていた。『日本書紀』もこうした漢字文化圏から生まれたものだが、『日本書紀』全書は「漢字」で表記され、漢文の文体、文字の潤飾、中国の典故などが用いられている。漢籍からの影響が『日本書紀』の形成には重要な意義を有しているのが言うまでもない。

しかし一方、『日本書紀』原典から影響されつつも、一部の意味の転化・転用がある。さらに、中国の思想および人物像を借用する部分もある。『日本書紀』は如何に漢籍の語句、典拠、思想を「使用」したのか。これら漢籍の語句、典拠、思想は『日本書紀』においてどのような意味合いを有しているのか。

『日本書紀』の「出典」分析に関しては江戸時代の国学者谷川士清が著した三十五巻本の『日本書紀通證』では既に「出典論」的方法を用いて『日本書紀』全書に対して用語、用句などの考察を行った。しかし、『日本書紀通證』はより適切な古写本を利用することができず、文献引用の典拠が必ずしも正確ではなく、『康熙字典』の用例を引用しただけで、その原典の内容を確認していなかった。1785年に河村秀根、河村益根父子によって編纂された三十巻本の『書紀集解』では『日本書紀通證』の不十分さを改善し、文献引用の数量および正確度を重視していた。『日本書紀通證』『書紀集解』の研究業績を踏まえたうえに、津田左右吉『日本古典の研究（上・下）』（岩

波書店、1948.8～1950.2）では、『日本書紀』各巻の「用字」と「語型」を中心に考察を行い、各巻の特徴および形成の背景を論じていた。太田善麿『古代日本文學思潮論Ⅲ―日本書紀的考察』（桜楓社、1962.11）では、各巻の「分注」「訓注」の数に着目し、各巻の編集状況を考究した。

さらに、以上のような成果を引き継ぎ、小島憲之『上代日本文学と中国文学―出典論を中心とする比較文学的考察　（上）（中）（下）』（塙書房、1962.9～1965.3）では日中比較の視點に立ち、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』などの日本上代文献を考察し、それらが如何に中国文献の影響を受け、その「出典」は如何なるものかを追究した。『日本書紀』に即していえば、小島氏の考察により、『日本書紀』各巻が引用した漢籍文献の数が異なり、しかも『藝文類聚』類書を頼る状況が多かったことが分かった。小島氏の出典研究の方法は『日本書紀』にのみならず、日本上代文献の研究に対しても重要な意義があろう。

しかし、これらの先行研究があるものの、漢籍が如何に『日本書紀』に影響を与えたのか、『日本書紀』がどのような漢籍を利用し、それを通して何を語ろうとしているのかなどの問題について必ずしも明瞭になっていない。したがって、本稿では、『日本書紀』における漢籍の影響・受容についての考察の一環として、その成立期に最も近く在位していた持統天皇に焦点を当て、『日本書紀』に描かれている持統天皇の関連記事および人物像を中心に検討していきたい。

また、研究方法について、本稿では、まず文献研究およびテキスト分析を行い、その上に、日中比較の方法を通して『日本書紀』に描かれている持統天皇像を漢籍と照らして、持統天皇の形象を迫っていくことにする。

持統天皇に関して、その主な記事は『日本書紀』の「天武天皇即位前紀」（巻二十八）、「天武天皇紀」（巻二十九）、「持統天皇紀」（巻三十）に記されているが、巻二十八は主に大海人皇子によって起こした壬申の乱の経緯を中心に述べている。巻二十九は主に大海人皇

子が天武天皇として即位してからの治世を語っている。巻三十は天武天皇が崩御してから、持統天皇の治世を物語る。以下はこの三巻に描かれている持統天皇（鸕野讃良皇女）の形象について追究していきたいと思う。また、便宜的に、この三巻をそれぞれに『天武紀』即位前紀、『天武紀』、『持統紀』と略称する。なお、以下、各テクストの原文・訓読の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。傍点・下線はすべて筆者によるものである。

2. 『持統天皇紀』の梗概と人物像

さて、『日本書紀』巻二十八から三十に記されている持統天皇の記事をまとめてみれば、主に次の七条が挙げられよう。（1）持統天皇の出自、（2）壬申の乱、（3）天武天皇の補佐と吉野の盟約、（4）天武天皇崩御、殯宮葬儀と大津皇子の事件、（5）持統天皇の称制と即位、（6）吉野への度重なる行幸、（7）軽皇子（文武天皇）へ譲位。では、まず（1）の持統天皇の出自について見てみたいが、『持統紀』には次のような記述がある。

> 高天原広野姫天皇、少名鸕野讃良皇女、天命開別天皇第二女也。母曰遠智娘。更名美濃津子娘。天皇深沈有大度。天豊財重日足姫天皇三年、適天渟中原瀛真人天皇為妃。雖帝王女、而好礼節倹、有母儀徳。天命開別天皇元年、生草壁皇子尊於大津宮。

中大兄皇子（後の天智天皇）を父とし、蘇我倉山田石川麻美呂の娘である遠智娘を母としている鸕野讃良皇女（後の持統天皇）は、生まれてから高貴な血筋が保障された。彼女の性格は深沈して大度有り、また帝王の娘でありながらも礼を好んで慎しんで倹約し、母としての徳があるというように描かれている。さらに、崩御してからも「高天原広野姫天皇」という立派な和風諡号が贈られているという。このような描写について、田中澄江氏は、「まことに生ける

観音像とも思えて立派そうである[1]」と指摘しているが、『日本書紀』は持統天皇に対して非常に高い評価をしていることが分かる。

このような持統天皇は、（2）壬申の乱に参与している。『天武紀』即位前紀（大海人皇子の東国入り）によれば、

是日、発途入東国。事急不待駕而行之。儵遇県犬養連大伴鞍馬、因以御駕。乃皇后載輿従之。

とあるごとく、皇后（鸕野讃良皇女）が輿に乗って夫の東国入りに従ったという。さらに、『持統紀』称制前紀には

天渟中原瀛真人天皇元年夏六月、従天渟中原瀛真人天皇、避難東国、鞠旅会衆、遂与定謀。迺分命敢死者数万、置諸要害之地。

と記されている。「遂与定謀」という表現について、上田正昭氏が「夫の未来に生涯をかけて、夫いちずに生き抜こうとし、その作戦会議にも列しており、気丈の人、鸕野皇女の姿そこにあるという。[2]」と述べている。大海人皇子の数ある妃の中で、大海人皇子とともに吉野に入ったのが鸕野讃良皇女だけであったこと、また、夫と生死をともにして作戦会議にも列席していることからも、鸕野讃良皇女の、夫と危機を乗り越えようとする勇敢な妻、気丈な妻としての一面が窺える。

つづいて、（3）についてだが、夫大海人皇子が壬申の乱に勝利して、天武天皇として即位すると、翌年、鸕野讃良皇女が皇后に立てられた。『持統紀』称制前紀で記されている「（天武）二年、立為皇后。皇后従始迄今、佐天皇定天下。毎於侍執之際、輙言及政事、多所毘補。」という内容からも、皇后は、常に夫の天武を助け、そばにいて政事について助言したことが分かる。

また、『天武紀』十年条には次の記事が見られる。

二月庚子朔甲子、天皇・皇后共居于大極殿、以喚親王・諸王及諸臣、詔之曰、朕今更欲定律令改法式。故俱修是事。然頓就是

---

[1] 田中澄江（1997）「持統女帝」『栄光の女帝と后』円地文子監修、人物日本の女性史第二巻、東京、集英社、p.133

[2] 上田正昭（1973）『女帝　古代日本の光と影』東京、講談社、p.136

務、公事有闕。分人応行。是日、立草壁皇子尊為皇太子。因以令摂万機。

天皇が皇后とともに大極殿に出て、親王・諸王および諸臣を呼び、詔したという場面である。大極殿とは大内裏の正庁である朝堂院の正殿のことで、この正殿では即位、大嘗会、朝賀、視告朔、御斎会など、重要な儀式が行われるが、天皇がそれらに出御したという[3]。この天武十年条に記されている「天皇・皇后共居于大極殿」の記事からも、皇后の鸕野讃良皇女が朝廷上においては非常に重要なポジションがあり、天智天皇の時代に行われた律令や法式を改めようとするという重要な政策に、皇后も参与していたことが分かる。これもまた前掲した「（天武）二年、立為皇后。皇后従始迄今、佐天皇定天下。毎於侍執之際、輙言及政事、多所毘補。」という記事に通じていよう。これらの記事は鸕野讃良皇女は非常に積極的に政治に関与することを示唆していよう。むろん、それは夫の天武からの認めがあったからこそ、鸕野讃良皇女はその政治に鋭い才能を発揮することができたのであろう。

たとえば、天武十年条の少し前に『天武紀』八年条には天武天皇、皇后および草壁皇子をはじめとした六人の皇子がともに吉野で盟約を交わしたという記事があり、いわゆる吉野の盟約である。その盟約の場で、「天皇曰、朕男等各異腹而生。然今如一母同産慈之。則披襟抱其六皇子。因以盟曰、若違茲盟、忽亡朕身。皇后之盟、且如天皇」とあるごとく、天皇が六人の皇子を一母から生まれたように互いに競争せずに協力せよといって皇子達に誓わせた。すると、皇后の唯一の子である草壁皇子がまず誓った。その後、五人の皇子が

---

[3] 大極殿について、詳細は小学館編（1994）『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館、東京、JapanKnowledge Lib〈http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000141556〉（閲覧：2017.8.1）、国史大辞典編集委員会編（1979）『国史大辞典』吉川弘文館、東京、JapanKnowledge Lib〈http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz290770〉（閲覧：2017.8.1）を参照願いたい。

誓った。天皇が皇子達を抱きしめた。最後に皇后が誓った。皇后もまた天皇と同様に皇子達を抱いた。この吉野盟約によって、持統は、「一草壁の生母から皇子たち全員の母に昇格した[4]」と考えられている。皇后が諸皇子の共通の母となれたのも、天武の心配りに違いはないが、天武を大いに補佐した皇后は夫の信頼を得ていたこともこの吉野盟約の記事を通じて示されている。

それから（4）について、病気に悩まされていた天武が天武十四年に年号を朱鳥に改めたが、やはり病気には逆らえず、彼がなくなられる前に、「秋七月癸丑、勅曰、天下之事、不問大小、悉啓于皇后及皇太子。」と命令したという記事がある。この命令により、皇后と草壁皇子が共同で政務を執るという体制が始まったと見られる。さらに、天武が亡くなると、皇后が盛大にその殯宮葬儀を行っていたが、その期間はなんと二年三ヶ月にも亙ったのである。この期間中、皇后が自ら政務を取っており、皇太子が何度も公卿・百官を率いて、殯宮に赴いて哀の礼（弔辞）を奉った。しかし、まもなく大津皇子の謀反が発覚した。大津皇子は草壁皇子より一歳年下で、母の大田皇女は皇后の姉であり、天智天皇の第一の皇女である。同じく皇女の子である大津皇子は、草壁皇子と同じく皇位継承の有力者であったに違いはない。それだけではなく、前掲した『天武紀』十年二月の「天皇・皇后共居于大極殿」と同日に、「立草壁皇子尊為皇太子。因以令摂万機。」とあり、草壁皇子を皇太子として立て、諸々の政務を管理させた。しかし一方、『天武紀』十二年条の「二月己未朔、大津皇子始聴朝政。」という記述によれば、皇太子の草壁皇子がいるにもかかわらず、天武が皇子大津に朝政を聞かせ始めている。父天武の心中では大津皇子が重要な位置を占めていることが示されていよう。

大津皇子について、『持統紀』称制前紀には次のような記述がある。本文は少し長いが、挙げておく。

---

[4] 遠山美都男（2005）「母と呼ばれた女帝—鸕野讃良皇女」『日本古代の女帝とキサキ』東京、角川書店、p. 137

(A) 朱鳥元年九月戊戌朔丙午、天渟中原瀛真人天皇崩。皇后臨朝称制。冬十月戊辰朔己巳、皇子大津謀反発覚。逮捕皇子大津、并捕為皇子大津所詿誤直広肆八口朝臣音橿・小山下壱伎連博徳、与大舎人中臣朝臣臣麻呂・巨勢朝臣多益須・新羅沙門行心及帳内礪杵道作等、三十餘人。(B) 庚午、賜死皇子大津於訳語田舎。時年二十四。妃皇女山辺被髪徒跣、奔赴殉焉。見者皆歔欷。(C) 皇子大津、天渟中原瀛真人天皇第三子也。容止墻岸、音辞俊朗。為天命開別天皇所愛。及長辨有才学、尤愛文筆。詩賦之興自大津始也。丙申、詔曰、皇子大津謀反。詿誤吏民・帳内不得已。(D) 今皇子大津已滅。従者当坐皇子大津者、皆赦之。但礪杵道作流伊豆。又詔曰、新羅沙門行心与皇子大津謀反、朕不忍加法。徙飛驒国伽藍。

(C) の記述によれば、大津は、立ち居振る舞いと言葉使いが優れ、天智天皇に愛され、学才があり、詩賦の興りは大津より始まるという。『日本書紀』は大津皇子に対して極めて高い評価をしていることが窺える。しかし、(A) のように、天武天皇および周囲の人々に愛されている大津だが、天武の崩御一か月後（皇后臨朝称制の時)、謀反が発覚し、逮捕されている。さらに (B) の記述によれば、詳しい訊問もされていないうち、速いスピードで処刑されたという。また、謀反に関わりのある人のうち、礪杵道作が伊豆に流され、新羅の僧行心は飛驒国の寺院に送られただけで、ほかの人は、すべて釈放されたことも (D) の記述を通して分かる。謀反から処刑までの時間の速さ、また訊問の不十分さなどの点からも、大津の死の背後には皇后がわが子の草壁皇子を守るため、大津を排除しようとする強い意志が存在していたことが想定できよう。

つづいて、(5) の持統天皇の称制と即位についてだが、天武天皇の崩御後、皇太子の草壁皇子がいながらも、皇后が政権を握りつづけており、三年の間、皇后の「称制」の形となっていた。『持統紀』三年正月条には、正月の初日に、皇后が万国を前朝に集めて朝賀（正月祝い）をしたという。皇后が天皇のように万国の朝賀を受け、天

皇の振る舞いをしていたことが注目されよう。こうした皇后の振舞いを、草壁皇子が皇太子として立てられた以来、ほとんど何も政務上の業績を上げなかったこと、また皇后が天武の殯宮葬儀の期間で長らく政権を握っていたことと考え合わせれば、おそらく体も気も弱いわが子の草壁皇子に対して、皇后がなかなか政治の権力を安心して草壁皇子に渡すことができなかったのだろう。皇太子でありながら、草壁皇子はあくまで「補佐」の立場に立っていたと考えられよう。すなわち、天武生前には皇后が天武を補佐する立場に立っていたのであれば、天武晩年になると、草壁皇子が皇后を補佐する立場に立つようになったのだと考えられよう。遠山美都男氏は「天武は天下の事は大小となく、皇后持統と草壁皇子に上申せよとの命を下ろした。これによって持統が天皇権力を代行し、それを草壁が輔佐するという体制が発足することになったのである。持統はこれ以後、事実上の天皇であったと言ってよいであろう。[5]」と指摘したが、氏の説が的を得ているといえよう。

しかし、皇位を自らの血筋に伝えようとした鸕野讃良皇后の計算が外れ、持統称制（持統三年）の間に唯一我が腹から出た草壁皇子は稚児の軽皇子を残して世を去った。軽皇子の成長を待って皇位に付かせようとする間に、鸕野讃良皇后の政治上の器量と野心が存分に発揮され、草壁皇子がなくなった翌年、皇后が三年間の称制を終え、自ら即位して持統天皇になった。

持統即位の経緯について、『持統紀』四年条（690年）には四年春正月戊寅朔、物部麻呂朝臣樹大盾。神祇伯中臣大嶋朝臣読天神寿詞。畢忌部宿禰色夫知、奉上神璽剣・鏡於皇后。皇后即天皇位。公卿・百寮羅列匝拝而拍手焉。己卯、公卿・百寮拝朝、如元会儀。

[5] 遠山、前掲注（4）書、p.141。

と記している。璽とは元来は印鑑を指しているが、中国の秦朝より、もっぱら皇帝の印を指すことになった[6]。また、『説文解字』によると、璽は本来は「璽」であり、「王者之印也[7]」という。さらに、漢蔡邕が著した『獨斷』においても「璽者，印也；印者，信也。天子璽以玉螭虎紐。[8]」と述べている。これらのことからも、中国では秦朝以後、璽は皇帝が専用する印となったことが分かる。ここで持統天皇に「璽」に献上するのは、皇后が「天皇」へと身分の変化が認められたことを示唆していよう。さらに、ここでは中国のように天子の印しを象徴する「璽」の献上という意のみならず、「神璽」という用語の通りに「神」の「璽」なのである。『令義解』神祇・践祚条には「凡践祚之日。〈謂。天皇即位。謂之践祚。祚位也。福也。〉中臣奏天神之壽詞〈謂。以神代之古事。為萬壽之寶詞也。〉忌部上神璽之鏡劒〈謂。璽信也。猶云神明之徵信 。此即以鏡劒称璽〉」という記録がある。この記録によれば、「神璽」とは「神明之徵信」であり、神の信を意味している。ここにある「神璽」について、武澤秀一氏は次のように述べている。

> 神璽とは、その所有者が神であることを証するもの。歴代大王（天皇）の即位に際し、鏡や剣といった王位を象徴するレガリアとしての璽（みしるし）が献上される慣行があった。しかし、王権を保障するだけのレガリアではなく、神であることを証する神璽が献上されたのは持統天皇が最初だった[9]。

これまでの璽（みしるし）の献上と異なり、持統天皇の践祚の場合にはこれまでになく、「神璽」が献上された。氏の論説を踏まえれば、「神璽」を受け取ることにより、持統が神となったことが考

---

[6] 陳鐵君主編（2008）『遠流活用中文大辭典』、台湾、遠流出版、初版一刷、p.1077
[7] 清段玉裁注、藝文印書館編（1979）『説文解字注』、台湾、藝文印書館、五版、p.694
[8] 『獨斷』中國哲學書電子化計劃
http://ctext.org/pre-qin-and-han/zh?searchu=%E7%92%BD（閲覧：2017.8.2）
[9] 武澤秀一（2013）『伊勢神宮と天皇の謎』、東京、文藝春秋、p.181

えられよう。おそらく持統が神になろうとしたい、自らを「神格化」したいという態度を、諸臣も察知していたのであろう。

また、即位早々に、持統天皇が伊勢神宮の式年遷宮を行った。この式年遷宮の制を制定したのは天武天皇十四年であったが、しかし実際に第一回内宮式年遷宮が行われたのが持統天皇四年（690 年）であり、すなわち持統が即位した年であった。さらに、その二年後、持統天皇六年（692 年）には第一回外宮式年遷宮が行われた。『持統天皇紀』六年条には、持統が先帝天武以来の重臣であった三輪朝臣高市麻呂の反対を押し切って、農作の邪魔になるという理由を聞き入れず、伊勢の行幸へ強行した。これらのことを見合わせれば、やはり自らを神と結びつけ、自分を神格化にしようとする気持ちが持統の中に強かったと考えられよう。

さて、持統が即位してから、直ちに様々な新政を始めた。即位した年の秋七月に新しい朝服（「丙子朔、公卿・百寮人等、始着新朝服」）、新しい人事（「庚辰、以皇子高市、為太政大臣。以正広参、授丹比嶋真人、為右大臣。并八省・百寮、皆遷任焉。辛巳、大宰・国司皆遷任焉。」）、また十一月甲申条には元嘉暦と儀鳳暦が実施された記事がみられる。なお、同年（持統四年）の冬十月壬申条に「高市皇子観藤原宮地」、十二月辛酉条に「天皇幸藤原観宮地。公卿・百寮皆従焉。」と記されているごとく、新しい都―藤原宮の建設も進んでおり、太政大臣も天皇も自ら現場まで行って藤原宮の建築を視察にいった。ようやく、藤原宮が完成され、持統天皇八年十二月に都が天武朝時代における飛鳥浄御原宮から藤原宮に移された。

この藤原京は『日本書紀』以下の文献に「藤原京」ではなく「新益京」と表現されていることは注意すべきことである。新益京とは名義通りに、「新たに益された京」の意と考えられるが、新京に対する当時の為政者の意欲と期待を読みとることができるのである。持統天皇三年には古代法令として最初の体系的な法典といわれる「飛鳥浄御原律令」が編纂・施行されており、藤原京の造営がそれ

をうけて開始されていることは、新京の造営が律令国家の建設と軌を一にしていることを示していよう[10]。

それだけではなく、『持統紀』五年条には「八月己亥朔辛亥、詔十八氏、大三輪・雀部・石上・藤原・石川・巨勢・膳部・春日・上毛野・大伴・紀伊・平群・羽田・阿倍・佐伯・采女・穂積・阿曇。上進其祖等墓記。」とあり、天皇が十八氏を集め、その祖先たちの墓記を提出させた。これは『天武紀』十年条の帝紀・上古諸事の記定の事業を引き継いだものと考えられるが、十八氏を選び出すのがやはり持統なりの取捨選択があり、持統朝の中央集権への考慮が入っていたと考えられよう。

このように、持統が天武朝の政策を継承しながら、次々と新しい政策も実施した。この中で、持統が夫天武と最も大きく違っているのは、(6) 吉野への度重なる行幸であった。天武が在位中、天武八年の吉野盟約の際に吉野を訪れたのみであり、一回きりの吉野行幸であったのに対して、持統は称制時期は二回、在位期間中は二十九回、計三十一回の吉野行幸である[11]。持統はこれほど吉野行幸に拘った理由について、「夫天武天皇が開いた皇親政治の原点の地吉野を国見することによって、天武の霊威を魂ふりすることができる」(桜井満氏[12])、「亡き天武天皇の霊の加護を祈りたかった」(田中澄江氏[13]) といった説もあるが、前述した伊勢神宮の式年遷宮、伊勢神宮の行幸への強行などのことから考えれば、神仙の地と看做されてい

---

[10] 「新益京」に関する資料は、国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』(吉川弘文館、東京、1979.3.1～1997.4.1) を参考にしたものである。JapanKnowledge Lib〈http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz419470〉(閲覧：2017.8.1)

[11] 持統三年 (2回、正月、八月)、四年 (5回、二月・五月・八月・十月・十二月)、五年 (4回、正月、四月、七月、十月)、六年 (3回、五月、七月、十月)、七年 (5回、三月、五月、七月、八月、十一月)、八年 (3回、正月、四月、九月)、九年 (5次、閏二月、三月、六月、八月、十二月)、十年 (3回、二月、四月、六月)、十一年 (1回、四月)

[12] 桜井満 (1996)「吉野川と神仙思想」『古代の山河と伝承』東京、おうふう、p.54

[13] 田中、前掲注 (1) 論文、p.154。

た吉野へ頻繁に行くのも、持統女帝の自らを神格化し、神仙（神）になろうとするという行動の一環として理解できよう。これもまた「高天原廣野姫天皇」（日本書紀）、「大倭根子天之廣野日女尊」（続日本紀）という、「天」を意識しつつ、天上の神に近い呼称が贈られたことに通じていよう。おそらく当時の重臣達や、『日本書紀』の編纂に携わる人々も、神になりたいという持統女帝の意志が読取れたのであろう。

さらにいえば、前掲した天武八年の吉野盟約の記事には、天武が皇后を草壁の一人の母から皇子全員の母に引き上げたという行動を通じて、皇后の内心には自分の「重要性」、さらに夫が皇后に対する「重視」を感じとったはずである。それが、後に皇后がさらに一歩進んで積極的に政務に参与したこと、天武十年の天皇・皇后が共に大極殿に出たこと、さらに朱鳥元年の天下の事をすべて皇后及び皇太子に聞けという詔、その上に天武の崩御後に皇后が一人で政権を握り締めたことに繋がっていったと考えられる。このように考えると、吉野盟約以後の吉野は皇后にとっては、政権を握り始めた原点であり、自らの権力の世界を構築しはじめた意義深い場所と言えよう。度々の吉野行幸は、持統の権力構築を改めて確認するためではないか。政務にくたびれかけた際に、改めてその「原点」に戻ってリフレッシュができたのである。さらに吉野へ行くたびに、皇后時代の鸕野讃良皇女が天武の「認め」があり、皇子達の共通の「母」となったということも改めて喚起しようとしたのであろう。このような「母」であるこそ、皇子達を超えて天武の意思および皇位を継ぐ「資格」を持っているのだと宣言しようとしたのであろう。むろん、行幸のたびに、官員のみならず、人民の仕事を妨げて困らせることもあるが、古代の君主が国を巡行することにより、その君主としての立場が改めて確認されたという意義もあろう。このことは、持統女帝に対しても適用ではないか。人民に多大な迷惑をかけたこそ「天皇」としての「影響力」を発揮するものであり、巡行が天皇

の責務であり、天皇としての「資格」を示す方法の一つと捉えられよう。

このように、頻繁な吉野行幸は必ずしも単一の要素ではなく、さまざまな持統の思惑が入っていると考えるべきだが、総じて言えば、持統の、現人神である「天皇」とする資格の再確認だと言えよう。持統は神であり、天皇なのであるということである。

そして、(7) 軽皇子（文武天皇）へ譲位についてだが、こうして強引しつつ、非常に強勢な女帝である持統天皇は、『持統紀』十一年に孫である軽皇子へ譲位した。しかし、持統は譲位しても一向して政治権を持っていたような消息は、『續日本紀巻二 文武天皇(大寶二年十月)』の「(十月)甲辰。太上天皇幸参河國。令諸國無出今年田租。」、また『帝王編年紀巻十　文武天皇（大寶二年十月）』の「十月。太上天皇幸三川國。令免當年田租。十一月還京。十二月十日太上天皇崩。」、太上天皇となった持統が、行幸をやめず、さらに行幸先の田租などを免じたという記事からも窺える。

以上に見てきたものをまとめれば、『日本書紀』に描かれている持統天皇は、高貴な血筋を有していながら、夫を補佐し、さまざまな困難を乗り越えたり、政務上にも大いに夫天皇に助言をしたりした、気丈で勇敢かつ智謀のある女性であることが分かる。さらに、天武の崩御後、天武の政策を継承しつつも、新政へ踏み出したこと、譲位しても政権を握り続けており、政権を手放すことがなかったことも、持統天皇の政治上での野望およびパワーが読取れる。また、「高天原廣野姫天皇」（日本書紀）といった和風諡号、吉野、伊勢などへの頻繁な行幸、さらに伊勢神宮の式年遷宮などからも、自らを「神格化」にしようとした持統女帝の強い意志が窺える。

3.　持統天皇像と漢籍

さて、このような持統天皇像を漢籍と見合わせれば、様々な類似の語句、または人物像が認められる。たとえば、『持統紀』称制前紀にある「雖帝王女、而好礼節倹、有母儀徳。」という表現が、『後

漢書』「皇后紀上」には「郭主雖王家女，而好禮節儉，有母儀之德。」にほぼ同じである。それは漢光武郭皇后の母郭主についての描写である。また、「（天武）二年、立為皇后。皇后従始迄今、（A）佐天皇定天下。（B）毎於侍執之際、輙言及政事、多所毘補。」という記事の（A）は『史記』「呂太后本紀」には「呂后為人剛毅，佐高祖定天下」と近似している。また、（B）は『後漢書』「皇后紀上」漢顕宗の馬皇后条には「后輒分解趣理，各得其情。毎於侍執之際，輒言及政事，多所毗補，而未嘗以家私干。」とある表現とは全く一致している。

それだけではない。『烈女伝』「母儀」の項目には帝堯の女である娥皇と英が同時に舜に嫁いだが、「二女承事舜於畎畝之中，不以天子之女故而驕盈怠嫚，猶謙謙恭儉，思盡婦道。」と記されていうように、天子の娘にも関わらず、謙虚で恭儉に婦人としての道を尽くすという[14]。さらに『藝文類聚』巻十五后妃部には『毛詩』の内容を引用し、「后妃在父母家，則志在於女功之事，躬儉節用…」、「后妃之志也。又當輔佐君子，求賢審官，知臣下之勤勞，内有進賢之志…」とある。これらの記述もまた『日本書紀』の持統天皇像に通じていよう。このようなことからも、『日本書紀』の持統天皇は漢籍からの影響が少なからず、『日本書紀』に描かれている持統天皇像が「母としての徳がある」、「君主を補佐する」、「謙虚で恭儉である」などの美徳が、漢籍に描かれている皇后に相応しい「資質」と重なっており、『日本書紀』が漢籍に描かれている理想的な皇后像を語ろうとする意図がこの持統天皇像にはあったことが認められよう。

---

[14] 小島憲之氏によれば、『日本書紀』には『藝文類聚』といった類書の引用が多かったという。しかし『藝文類聚』に引用された『烈女伝』には「母儀」の項目がなく、持統天皇紀に似た内容も少ない。そのため、『藝文類聚』に引用された『烈女伝』よりも、『日本書紀』の編者が直接に西漢の『列女傳』を参考した可能性が高かったと考えてよかろう。【小島憲之（1962—1965）『上代日本文学と中国文学—出典論を中心とする比較文学的考察（上）（中）（下）』、東京、塙書房】

一方、天武の崩御後、殆どの政務が皇后の鸕野讃良皇女が握っており、皇后は三年の間称制して、四年になると、女帝として即位したことは前述したとおりである。夫の皇帝が亡くなり、皇后（または皇太后）が非常に積極的に政務に参加し、政権を握った用例は中国にも少なくない。たとえば、前述した『史記』「呂太后本紀」には、呂后が我が子の劉盈（のちの恵帝）が即位したにもかかわらず、皇太后と称制し、政治権を握ったのである。ほかにも『東觀漢記』には「和熹鄧皇后」の記事が見られるが、鄧后は夫の和帝が崩御した後、幼い殤帝が即位すると、皇太后として「臨朝聽政」を始めたという記述がある。これらの漢籍に記されている皇后・皇太后の政治に対する関与が持統の称制および天皇になったという記事とは無縁ではないが、しかしこれらの漢籍の歴史上の皇后よりも、『日本書紀』の持統女帝の形象は恐らくほぼ同じ時代の人物であり、中国の歴史上に唯一「女帝」として認められていた「武則天（則天武后）」からの影響が大きかったのであろう。

「武則天」は、八十一歳の高齢でなくなったが、その生存期間は624—705年と判断され[15]、持統天皇の645－703年と重なっている。武則天について、『旧唐書』巻六「本紀第六・則天武后」には次のような記述が見られる。

> 初，則天年十四時，太宗聞其美容止，召入宮，立為才人。及太宗崩，遂為尼，居感業寺。大帝於寺見之，復召入宮，拜昭儀。時皇后王氏、良娣蕭氏頻與武昭儀爭寵，互讒毀之，帝皆不納。進號宸妃。永徽六年，廢王皇后而立武宸妃為皇后。高宗稱天皇，武后亦稱天后。后素多智計，兼涉文史。帝自顯慶已後，多苦風疾，百司表奏，皆委天后詳決。自此內輔國政數十年，威勢與帝無異，當時稱為「二聖」。弘道元年十二月丁巳，大帝崩，皇太子顯即位，尊天后為皇太后。既將簒奪，是日自臨朝稱制。（後略）

[15] 张撝之、沈起炜、刘德重（1999）『中国历代人名大辞典』、中国、上海古籍出版社、12月第1版、p.1406

この記述によれば、唐太宗のとき、武則天が美貌であると聞き、後宮に入れ、才人となったが、後に太宗の子である高宗の寵愛を受け、様々な困難を乗り越え、皇后となった。武后は極めて智謀があり、文史にも通じている。その折、高宗は天皇と、武后は天后と称されていた。さらに、高宗は顯慶以降に罹病し、すべての政務が武后の採決に委ねられた。それより、武后が高宗の政権を数十年補佐し、その威勢が高宗と変わらぬため、世間は皇帝・皇后を「二聖」と称した。夫の唐高宗の崩御後、皇太子顯が即位し、天后を皇太后と尊称したのだが、まもなく皇太后はわが子の手から政治権を奪い、自ら「臨朝稱制」をしたという。

また、『資治通鑑』巻第二百一「唐紀十七・高宗麟德元年」では次のように記述している。

> 自是上每視事，則后垂簾於後，政無大小，皆與聞之。天下大權，悉歸中宮，黜陟、殺生，決於其口，天子拱手而已，中外謂之二聖。

高宗が朝廷で役人に会うときに、皇后は必ず、簾をたらして高宗の後ろに座して大小の政務を聞き、黜陟か殺生かはすべて皇后のお言葉で決められていたという。

同じく『資治通鑑』だが、その巻第二百三には「遺詔太子柩前即位，軍國大事有不決者，兼取天后進止。」、「中宗即位，尊天后為皇太后，政事咸取決焉。」といった記述がある。高宗の遺詔によって武后の政治参与の正当性が大きく保証されていることが分かる。

このように、武后は政治に対する強い関心を持つのみならず、政治家としての頭脳もあった。積極的に政治に参与し、早い時期からすでに高宗と「共治体制」をなしており、「二聖」とも呼ばれている。その上、顯慶以降はすべての政務を執っており、わが子が即位してからも、皇太后として政事に深く関与していたことが以上の資料を通して分かる。

こうした則天武后は単に中国歴史上での権勢がある皇后というだけではない。「天皇」という呼称はこれまでにはなかったが、高

宗・武后の時代にのみ用いられており、上元元年（674年）秋八月に武后と高宗を、「天皇天后」と併称したのである。また、夫の唐高宗の崩御後、息子の中宗・睿宗が次々と即位した時、武后は皇太后となり、臨朝稱制（683－690年）をし、後に名を曌に変えた。後に四男の睿宗が廃され、武周時代を迎えると、中国史上初の女の皇帝となり、690－705年に在位していたのである。武后は半世紀ほど政権を握って、大きく唐の朝政を左右し、当時の国際情勢にも影響を及ぼす女性であったことは多いに注目に値する[16]。このような中国史上初の女帝である則天武后に対して、時代がちょうど重なっている日本の持統女帝はどうであろうか。

持統女帝について、上田正昭氏によれば、天武帝は、その治世十四年の間において、いわゆる官僚貴族からは一人も大臣に任命しなかった理由は、主として、天皇と皇后との「共治体制」が成立していたためであったのであろう[17]。天武朝の諸改革に、鸕野讃良皇后は陰の力として参画したことが想定できる。高宗・武后の「共治体制」は、「佐天皇定天下。毎於侍執之際、輙言及政事、多所毘補。」「天皇・皇后共居于大極殿、以喚親王・諸王及諸臣、詔之曰、朕今更欲定律令改法式。」といった天武・鸕野讃良皇后との関係と同じ趣旨を有していよう。

持統女帝と武則天との類似点はここに留まらない。大津透氏の考察によれば、日本の「天皇号」が天武朝に至って成立され、『持統天皇紀』には単に「天皇」という呼称を持ち、先帝天武天皇を指している用例もあるため、天武天皇が日本史上において初めて「天皇」と呼ばれる君主であるという[18]。一方の中国では、前述したように、

---

[16] 則天武后の政治進出については、以下の書籍に詳しいので、参照を願いたい。王小甫（2008）『隋唐五代史:世界帝國・開明開放』、台湾、三民書局、初版一刷。高明士・邱添生・何永成・甘懷真編著（2006）『隋唐五代史（増訂本）』、台湾、里仁書局、増訂一版。張豈之（2002）『中國歴史—隋唐宋史—』台湾、五南圖書出版、初版一刷。

[17] 上田、前掲注（2）書、p.137。

[18] 大津透（1999）『古代の天皇制』東京、岩波書店、pp.4-6

「天皇」という呼称は高宗以前も以後も認められず、高宗・武后の「共治時代」のみに用いられていた。この「天皇号」の使用においても、天武・持統と高宗・武后とが近似していることが認められよう。

それに、武則天が臨朝稱制後、名を曌に変えた。曌が武則天の作った則天文字の一つだが、字面通りに、太陽のように空を照らすという意として捉えられる。さらに、彼女が即位する年（690 年）の七月に、僧法明などが著した『大雲經』四巻では、彌勒佛の化身として下凡し、天下の主とすべき人であるというように描かれていえる。すると、武則天は諸寺の造営、寄進を盛んに行ったほかに、自らを弥勒菩薩の生まれ変わりと書いた『大雲經』を納める「大雲経寺」という寺院を全国の各州に造らせた。このことからも、武則天が自らを神格化にしようとした願望が明らかに読み取れよう。このことは、彼女の数多くの称号からも分かる。

武則天の皇后時代において、天后、大聖天后、天后聖帝、聖后、則天皇后、則天順聖皇后など多くの呼称がある。さらに、皇帝になってからも、聖母神皇、聖神皇帝とあり、中宗皇帝在位中の時、則天大聖皇帝、後に金輪聖神皇帝、越古金輪聖神皇帝、慈氏越古金輪聖神皇帝、天冊金輪聖神皇帝などの名が見られる。『中文大辭典』によれば、「則」の語意の一つは「即ち」の意味である[19]。「則天」は即ち「天」であるという意で、「則天＝天」ということとなるが、これらの呼称、名称からも、彼女が非常に「天」を重視し、自らが即ち天であり、天にいる聖なる神であることを強調したかったのであろう。

これに対して、持統天皇の和風諡号が「高天原廣野姫天皇」（日本書紀）、「大倭根子天之廣野日女尊」（続日本紀）である。また、持統即位式の際の「神璽」の剣・鏡を引き受けた。さらに即位の年に式年遷宮が行われた。また頻繁に吉野の行幸に行った。これらの

[19] 陳鐵君主編（2008）『遠流活用中文大辭典』台湾、遠流出版、p.199

ことも、持統女帝が武則天と同様に、天を意識し、天上の神になろうとする意図があったと考えられよう。

さらに、日本古代には八人の女帝がいたといわれながらも、持統の持つ政治的実権が半端ではなく、ほかの女帝とは段違いであった。夫の政策を引き継ぎながらも、新たな政策、都、人事などを実施した正真正銘の女帝だからである。その政治的生涯もまた、「皇后⇒称制⇒即位⇒太上天皇」という中国史上初の「女帝」として認められていた武則天と一致していよう。武則天が持統よりも早く政治権に入り込み、権力を握っていた姿が幼い鸕野讃良皇女の目に焼きついたのであろう。

父中大兄皇子（天智天皇）の白村江の戦い（663年）での敗北は、鸕野讃良皇女が知らないわけはなかった。時代としてはちょうど唐の高宗・武后の時代であった。顯慶五年（660年）に高宗が病気のため、武后に朝政の代理を命じたこと以来、すべての政務が武后の採決に委ねたようになったので、白村江の戦いの最高指導者が武則天であったと考えられる。若き鸕野讃良皇女にとってはこのパワフルな唐の皇后に対して強い好奇心を持っても不思議ではない。そのため、天武・持統朝には遣唐使の派遣がなかったとしても、持統が即位してから大唐の続守言・薩弘恪を音博士として採用し、正月の際に「漢人奏踏歌」「唐人奏踏歌」などのように唐の風習もまねをした。持統は唐に対する関心が絶えることはなかった。特に武則天の長い称制時期についても、鸕野讃良皇女が長年、注目してきたのであろう。皇太子の草壁皇子がいながらも、鸕野讃良皇女が自ら政権を執っていたことも、こうした武則天の称制からの刺激であったと考えられないか。

4. おわりに

以上の考察を通して、次の二点が指摘できよう。（一）『日本書紀』に描かれている皇后としての鸕野讃良皇女は「母としての徳がある」、「君主を補佐する」、「謙虚で恭倹である」などの美徳の

持ち主であり、その形象には漢籍における理想的な皇后像が内包されている。(二) 女帝としての持統天皇は、当代の中国史上初の「女帝」とされる武則天の形象に近似している。武則天をモデルとし、一つの偉大な時代を切り開くパワフルな「聖なる神」に近い存在で、高天原で地上を照らす太陽の女神らしい「高天原広野姫天皇」的な女帝の形象を描こうとしていた意図が『日本書紀』にはあったと考えられる。

しかし、武則天は中国の歴史においては必ずしも肯定的な一面だけではなく、むしろライバルをさぼす残酷な手段によって、悪女としての名が高い。そのマイナス的な一面は『史記』の呂太后や『東觀漢記』の和熹鄧皇后の例からも見られる。にもかかわらず、『日本書紀』は基本的には理想的な皇后像および偉大な女帝像を持統天皇に付与している。『日本書紀』は漢籍の語句・典故、中国の人物像を援用しながらも、自分なりの持統天皇像を作り出しているのである。中国文化の受容の中に、変容が認められ、その変容は『日本書紀』の編纂意図に関わっている。なぜ『日本書紀』はこうした持統天皇像を作り出すのかについてもう少し検討が必要だが、今回は紙幅の関係で、持統天皇の皇后および女帝としての形象と漢籍・中国との関係を明らかにするところに留まりたい。

テキスト（日本語）

小島憲之ほか校注・訳（1998）『新編日本古典文学全集 4—日本書紀 3』、東京、小学館

黒板勝美編（1961）『新訂増補国史大系第二部 2—令義解』、東京、吉川弘文館

黒板勝美編（1962）『新訂増補国史大系 3—続日本紀前篇』、東京、吉川弘文館

黒板勝美編（1965）『新訂増補国史大系 12—扶桑略記・帝王編年記』、東京、吉川弘文館

テキスト・辞書（中国語）

韓兆琦注譯（2008）『新譯史記（一）本紀』、台湾、三民書局、初版一刷

韓復智・洪進業註、國立編譯館主編（2003）『後漢書紀傳今註』、台湾、五南圖書出版

嚴一萍選輯（1967）『百部叢書集成―東觀漢記』、台湾、藝文印書館

上海古籍出版社編（2013）『宋本藝文類聚』、中国、上海古籍出版社

清段玉裁注、藝文印書館編（1979）『說文解字注』、台湾、藝文印書館

张撝之、沈起炜、刘德重（1999）『中国历代人名大辞典』、中国、上海古籍出版社、12 月第 1 版

張敬註訳（1994）『列女傳今註今譯』、台湾、台湾商務印書館

陳鐵君主編（2008）『遠流活用中文大辭典』、台湾、遠流出版、初版一刷

楊家駱主編（2000）『新校本舊唐書附索引一』、台湾、鼎文書局

楊家駱主編（2012）『新校資治通鑑注(第十一冊)』、台湾、世界書局、一版十九刷

参考文献

上田正昭(1973)『女帝　古代日本の光と影』、東京、講談社

太田善麿（1962)『古代日本文學思潮論Ⅲ―日本書紀的考察』、東京、桜楓社

王小甫（2008)『隋唐五代史:世界帝國·開明開放』、台湾、三民書局、初版一刷

大津透（1999）『古代の天皇制』、東京、岩波書店

北山茂夫（1979）『天武朝』、東京、中央公論社

高明士·邱添生·何永成·甘懷真編著（2006)『隋唐五代史（增訂本)』、台湾、里仁書局、增訂一版

小島憲之（1962—1965）『上代日本文学と中国文学—出典論を中心とする比較文学的考察（上）（中）（下）』、東京、塙書房
桜井満（1996）「吉野川と神仙思想」、『古代の山河と伝承』、東京、おうふう
武澤秀一（2013）『伊勢神宮と天皇の謎』、東京、文藝春秋
田中澄江（1977）「持統女帝」、『人物日本の女性史第二巻—栄光の女帝と后』、円地文子監修、東京、集英社
津田左右吉（1948-1950）『日本古典の研究（上・下）』、東京、岩波書店
張豈之（2002）『中國歷史—隋唐宋史—』、台湾、五南圖書出版、初版一冊
鄭家瑜（2012）『記紀における天皇像への考察——「作品論」を視座として』、台湾、天空数位図書
遠山美都男（2005）「母と呼ばれた女帝—鸕野讃良皇女」『日本古代の女帝とキサキ』、東京、角川書店

参考サイト

小学館編（1994）『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館、東京、JapanKnowledge Lib
〈http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000141556〉（閲覧：2017.8.1）
国史大辞典編集委員会編（1979）『国史大辞典』吉川弘文館、東京、JapanKnowledge Lib
〈http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz290770〉（閲覧：2017.8.1）
『獨斷』中國哲學書電子化計劃 http://ctext.org/pre-qin-and-han/zh?searchu=%E7%92%BD(閲覧：2017.8.2)

付記：本稿は2015年 11月 14 日に開催された台湾輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム×「東アジアと同時代日本語文学フォーラ

ム」で、「『日本書紀』に見る漢籍の影響と表現―持統天皇の形象を中心に」を題として発表した内容を論文にまとめたものである。会議中、諸先学から有益なご意見をいただき、また論文掲載に当たり、査読の先生方から貴重なコメントをいただいた。ここに記し、心からの御礼を申し上げたい。

※2018年2月25日原稿受理　2018年3月26日審査通過